

教員ひとすじ・有言実行

高橋 民子

大正八（一九一九）年生まれ
野火止在住

女の仕事は教員しかなかった

川口市の飯塚で生まれ、親は鋳物工場
で働いていました。もう小さいときから、
何か仕事をしたくてね。小学校に入ると
知らないことを教えてくれるでしょ。新
しいことを覚えるのが楽しくて。お行儀
は「乙」だったけどあとは全部「甲」。
四年のときの担任がいい先生で、進路
の面倒をみてくれたの。中学校や女学校
へ行く子と一緒に勉強させてくれて、高
等科に行つてからは二年間、夜九時頃ま
で先生の家で男の子二人と私で勉強して。
夜食をもらつて居眠りをしちやつたこと

もあるの。三人とも貧しい家の子だつた
ので、お礼も何もしなかつたけど。国費
で教員を養成する師範学校に、みんな合
格した。

当時は成績良かったって女の子の職業が
なかつた。なるようなものっていったら、
教員かお産婆さんか髪結いくらい。私は
血を見るのがダメだったし、髪のおもヌ
ルヌルして気持ち悪い。お金のあるお嬢
さんたちはお花やお琴をやるけど、そう
いう友達に勝つには教員になるしかなか
つたの。

親は朝五時頃から仕事に行つたので、
朝と昼の弁当を歩いて届けてましたね。

そんな生活だったので、近所にいた人の
話では、「民ちゃんは学校受かんなきやい
い」つて、おかあさんたちが言つてたつ
て。月謝はなくても教材費とかがかかる
からね。

だから、近所の人たちにはすごくお世
話になつた。お裁縫の反物や生地を借り
たり、「年頃なんだから化粧水くらいつけ
たら」つて借りたり。お風呂もあつたん
だけど、石炭買うのが大変で沸かさなく
なつた。首筋なんか汚れると拭くんだけ
ど、それでもダメになると、おじさんの
家にもらい湯に行つたりしてね。
でもねえ、そういう生活を別に恥ずか

しいとも思わないし、とにかく学校へ行っていろんなことを教えてもらえるのが楽しくてね。貧しいとか苦しいとかってことは思わなかったね。自分の意思ですつとやってみてきちゃった。

結婚で「川向こう」の新座へ

川口で教員をしていて、昭和一六（一九四一）年に結婚して新座に来ました。連れ合いも師範出で、結婚の話があつたとき、「師範出の女の人を」ということだったので、ずつと教員を続けさせてもらえると思つて承諾したんですよ。

この大和田の家はおばあさん（お姑さん）が早くから一人で守っていたんです。が、孫が生まれたら早く顔が見たいらしくて、「すぐ来い、来い」って言われてね。

昭和一八年二月に長男を産んで、三月にはここへ来て、四月から大和田小学校に勤めました。

このあたりは浦和のほうからは荒川で隔てられていて、「川向こう」といって割合に不便だったから、師範出の先生はあまり来なかったのね。私は子どもをみて

くれる人がいなかったから、家に一番近い学校にもらったの。おばあさんに赤ん坊を学校まで連れてきてもらつてお乳を飲ませました。NHKの朝のドラマ『おひさま』みたいって言われるけど、見ていません。私以上に大変な人はいなかったと思つているから。

師範のとき、春の遠足でこのあたりに来たことがあるんです。スマイレが咲いて、野火止水水が流れていて、いいところだなあつて思つていたんです。でも、来てみたら、雨が降ると用水が茶色になつて、お風呂に入ると毛穴に泥がついちゃつてつるべ井戸も深く、怖くて一週間はくめなかつた。ポンプ式じゃないのよ。「これは中江藤樹のいう江戸時代の生活だな」って。そういう本は町のほうへ行つて立ち読みしてたからね。

当時は北足立郡の学校で「お掃除コンクール」っていうのがあつて、大和田小は一番になったこともあるんですよ。トイレの床が光つていて、借りにきた人は履物を脱いで入ったくらい。校長の指導が厳しかつただけで、子どもも素直だ

から、よく言うことをきいて、きれいにやつたんですよ。でも、冬になるとこのあたりは風が強くて、埃で汚くなつちゃう。三月が一番風がひどくて、四月になると落ち着いて、また鏡のように黒光りの床になつたの。

子どもたちはほんとに素直でいい子でした。冬は中野の山の方から野火止下の方まで麦畑になるの。そうすると麦踏みをするんですよ。学校は休みで、みんなお百姓仕事のお手伝い。

それと、冬は校庭がぬかっちゃんいますからね、赤土で。そうすると高等科の生徒がリヤカーや荷車で柳瀬川のところの土をもつてきて庭にまくんです。踏むのは五、六年生も一緒にやりましたね。だから子どもたちは、学校の生活だけじゃなく、自分たちの地域にも触れていた。今の小学生とは全然違いますね。

戦後一年間はボート

教員になつた頃はすでに戦時中だったので、川口にいたときは体力検査の手伝いをしたり。こつちへ来てからは、女子

青年団と一緒に、なぎなたなんかをやりましたね。私は体育のほうが進者だったから、先頭に立ってやってました。

体操の授業を外でやっているとき、警戒警報が鳴らずに、すぐ空襲警報が鳴ったときがあつてね。子どもたちはすぐ教室に入れたんだけど、私は逃げ遅れちゃって木の陰に隠れて。あのときは怖かった。葉莢（やつきょう）が校庭に落ちてきたりしたんだから。校庭のはじっこに防空壕を掘って、学籍簿やなんかを投げ込んで、自分たちも入ったりしたけど、爆弾が落ちたらいちころでしたね。

戦後、進駐軍が来て、教育の方針や内容が変わったんだけど、一番嫌だなあ、変な風になっちゃったなあと思って思ったのは、一年生の社会科で「学校へ来るまでに、どういうお店があるか調べなさい」ってというのがあつてね。遊んで覚えることを何で学校で、つて。「学校はもつと他のことを教えればいいのに」って思つてね。

私は教育勅語、あれを基本として、教科書になくたつてびっちり教えたからね、

いわゆる道徳的なことはね。師範出た人はみんなそうだったんじゃないかと思えますよ。日本は、明治から教育勅語主体の道徳教育をやってきて、それで発展してきたんだつて、勉強して知っているから。この先もずっとそれでいくもんだと思つていたのが、敗戦でガラッと変わっちゃつた。

私たちの教えていたのが、よかつたのか悪かつたのか、判断つかなくなつちやつて、一年間ボツとしてた。自分の考え方と違つていたので納得できなかつたのかな。今まで言わなかつたけどね。あの頃の大きい子はともかく、小さい子に影響はあつたのかなつて思います。

厳しく、でも一緒に遊んだ

私はどうしても先生になりたくて勉強したし、担任の先生にも一生懸命仕込まれたんで、なんていうんだらう、自分にも人にもきついんですよ。厳しいの。

でも、教育実習で行つた附属の先生からね、「先生だからって威張つていないで、子どもがあいさつをしなかつたら、先生

から先にあいさつをしなくちゃだめですよ」つて言われて、「あつ、そういうものかな」つて。教室で正規に教わつたものより、ちよこちよこつて言われた普段の言葉のほうに身についてね。子どもに押し付けるのではなく、こつちからやさしく声をかけるとか、引つ張るようなことをする必要があつて。

子どもの頃、東京から来た同級生はローマ字を習つてたの。田舎の学校はやんなきゃならないこともやらなかつたのかな、つて思つてた。だから、体育で鉄棒だの跳び箱だの教科書にあると、そのとおりやらせた。私も好きなことだから。そうしたら池袋に転校していった生徒が、「田舎の学校だけど、体育なんかもちやんとやつていて、よくできるつてほめられたよ」つて言うのを聞いてね。それでまた勉強になつてね。

私は小学生のとき、H₂Oつて水は酸素と水素でできていると教わり、「あれ、こんなに簡単なの、理科つておもしろい」つて化学が好きになつちやつた。子どもつていうのはね、なんで変わるかわから

ないですよ。だから、先生っていうのはしっかりしなくちゃあね、子どもの一生が変わるかもっていうのをほんとに感じましたね。

宿題はみんなに同じように出しました。できない子にばかり出したら、かわいそうでしょ。「うちの子はよくできるから宿題出さないで」って言う保護者もいたけど、みんな平等にしないとね。

大和田小学校に高等科があった頃、男子生徒が来客用のスリッパを履いたことがあったの。冬で寒かったからだと思っただけだね。つかまえて「来客用だし、みんなの分はないのだからダメよ」って、みせしめに掃除をさせたの。そんなこともあって、朝礼でおしゃべりしていても、私が近づくとシーンとなりましたね。

でも、体育のときは子どもと一緒に走ったり、ドッジボールをやったり、雪の日は二時間くらいぶつ通しで雪合戦やったり。定年で辞めるまでそんなでしたね。職員室へはあまり行かず、子どもと遊んでいたほうが多かった。

志木小学校で教えていたときかな、万

引きをする子がいるっていう話があったの。日向ぼっこしながらいろんな話をして、最後に「やったことあるんだろう」って言ったなら、「うん、やった。でも母ちゃんに見つかっちゃって、今はやってない」なんて話をしたこともある。

昔の教え子の子がいてね。よくできるんだけど、いたずらをしてしようがない子だったの。でも、その子は叱らなかつた。「先生よ、なんでぼくを叱らないの?」「だって、叱ったって言うときかないだろうし、自分で悪いってわかっているもん」って。始終子どもと接していると、どんな子かって性格がわかってくるのね。教え子の子どもだったらなおさらね。

周りは見てくれていた

連れ合いは、教員を五年とちよつとやっただけで、結核になって退職ですよ。清瀬の病院へ行こうと思ったら患者が多くて、埼玉の人はなかなか入れない。陸軍病院のあとの療養所が蓮田にあったので、そこへ行つて一五年近く。四七歳で亡くなった。「連れてくるな」って言うん

で、子どももおばあさんも連れて行けなかつた。若いのに、大事な親一人残して、惨めですよ。わりあいおとなしい人だったね。

新座の大和田小から転勤するとき、最初は朝霞へ行くことになってたの。そして志木の校長が、「朝霞のなかでまわされて、お姑さんがいるのに新座に戻れないぞ」って、志木へ呼んでくれたの。いろんな交流会とかで私のことを知ってたからだと思う。

志木に九年いて、「おばあさんが年とつちやってどうにもならないから戻りたい」って言ったときも、最初は野火止小学校だったのを、どなたかが、一番近いからって大和田小に戻してくれた。私もつっぱっていたかもしれないけど、見てくれたのね、家庭のことなんかも。地元の間人だからね。だからほんとにありがたいと思つてますよ。

家事はお姑さん任せ

おばあさんからは「空身で歩くな、のそのそ歩くな」っていうのを年中言われ

てましたね。家のことは畑仕事から家事まで、おばあさんが一人でいっさいやっていた。孫の面倒をみながらやっていたら、時間を上手に使ったのよ。物置へ物をしまいにいったら、燃やすものを持つてくる、とかね。

私は好き嫌いがあつたから、お勝手は全部おばあさんにしてもらったの。そのかわり、裁縫が得意だったんで、襟を直してあげたり、モンペを縫ったりね。学校の仕事については何にも言わなかった。家が近いから用務員さんの片付けを手伝って遅くなったりしてもね。

こつちにきた最初の頃、朝、ご飯を炊きながら新聞を読んだら、すごく怒られた。「うまく火を燃やせないのに新聞なんか読んで」ってね。おばあさんはね、燃やしておいて前の家に水をもらいについて、帰ってくるまで燃えているんだけど、私は燃えないの、上手に。燃えるには酸素があればいい、っていうのは学校で勉強して知ってるんだけど、やり方がわかんないの。それで新聞読むから怒られたんですよ。

戦争中も、おばあさんが一生懸命に陸稲をつくっていたから、お米には不自由しなかったんだけど、「草をむしつてくれ」って言われたことがあったの。学校で教わってるから、陸稲（おかぼ）と草の区別はわかりますよ、って言ったんだけど、実るころになったら、私がやったところは陸稲が少ないんだよね。そういう失敗もしてね、農業を知らないから。結局なんでも「本」から教わってるのね。近所の人とあまり話さないし、こころはお年寄りが多かったでしょ。若い人は畑やってるし、仕事が違うから話さない。周りの情報っていうのが入ってこなかった。本屋さんの立ち読みなんかで吸収するしかなかった。

いいお姑さんだった

おばあさんはいいいお姑さんだった。マネできないの、息子の嫁さんに対して。お風呂はいつも私が一番で入った。「お母さん先に入ったら」って言うと、「おれは泥かぶってるからいい」って言って、わらで沸かしてくれるの。それと、畑で作

ったナスをぬか味噌につけて、朝ご飯に出してくれた。紫色で光ってたね、食べるとプシュって音がして、黄色いのがパカッと出てね、おいしかった。ぬか味噌には鎌の壊れた刃なんか入ってたね。おばあさんは子どもが好きだったから、教え子をうちへ呼んだりすることもあったの。大和田の子はお昼頃になると帰るのよ。でも志木の子は帰らない。「もうお昼になるけど」って言うと、「先生のうちで何を出してくれるか楽しみ」って。びっくりした。志木にはこの辺としては大きな商店街があったから、まちの子と田舎の子とは考えが違うんだって。

お金はなるべく使わない

戦後は農家でも子どもを学校へあげるようになつたでしょ。お金がないと、どうにもならない、それで無駄なことをしないようにしたね。うちでは野菜はおばあさんが作ってくれるし、ちよつとした普段着は、安い生地を買ってきて私が縫ったからね。

ご飯炊く新聞もね、洋裁の記事や自分

の勉強に関係するものをスクラップして、残りを物置に積んでおいて、それを使っただけで、多分、一升炊くの二〇枚使ったの。それを何とか一九枚にしようとしたけど、一枚減らすことはできなかった。貧しい生活して育ったから、何か新しいことで少しでも得にならないか、少しでもお金使わないように、っていうのが頭にあつたんでしようね。で、それがまたおもしろいから。

定年で学校辞めてから絵を描き始めたの。花が好きだから、通り道でいいのがあると、「もらつていきますよ」って独り言いつて、帰つてきて描いたりなんかしたんですよ。そのうち水墨で障子四枚分の大きなを描くことになって、しようがない、つて自分の貯金で離れを造つたの。「土地は夫の先祖様のものだけど、建物は私の金だからいいや」つて思つてね。八畳と一二畳半かな、今は絵だの写真だの、ガラクタがおいてある。

言葉と行動を一致させる

娘がね、私が出かけたときにお掃除す

るわけ。途中で早く帰つてきちゃうと、掃除やめちゃうの。「なんでやめちゃうの」つて言うと「どうせお母さん、気に入らないつてまたやるから」つて言われたことがあるの。几帳面なのね、きちつとしてないと気持ち悪い。

教える立場だから、自分もそうならなきゃね。「言葉と行動が違つたら主張がでない」つていう主義だから。しようがないの、これはね。学校で教わつたのをそのまま踏襲しているんだから。昔の先生をいい先生だと思つて、言われたとおりに育つてきたからね。退職しても教育勅語の精神でやつてるから。

八〇過ぎてからの同窓会の席で、私があいさつしてたら、他の先生が教え子としゃべつていたんで「私の話が嫌ならやめる」つて言つちやつたの。だつて教え子の前だもの、人の話を聞くように、つて教えている教師がねえ。それだけ、教師つていうのはなんだろう、憧れだったのかしら、理想だったのかしら。それほどの人間じゃあないんだけどね。だから、教えた子どもから、お役に立つような、

人のためになるような人ができるといいなあと思つていた。教員になつた人、医者になつた人も結構いるの。嬉しいよね。連れ合いが早くに結核になつて働けなくなつて、おばあさんが苦勞したでしよ。孫をみながらね。だから、私はどうしたつて頑張らなくちゃならない。てこだつて動きやしないよ、自己主張強くつて。

九〇歳になつておとなしく？

六〇の定年で辞めたときに、「まだ鉄棒ができるかな」つて、逆上がりをやつたのできたの。やつちやうのよ、ばかね。フラフラしてね。雪が降るとスキーにスケート。普段からしっかり体を動かしてたから。とにかく負けるのが嫌なのね。何とかして勝ちたい、だから努力するわけよ。

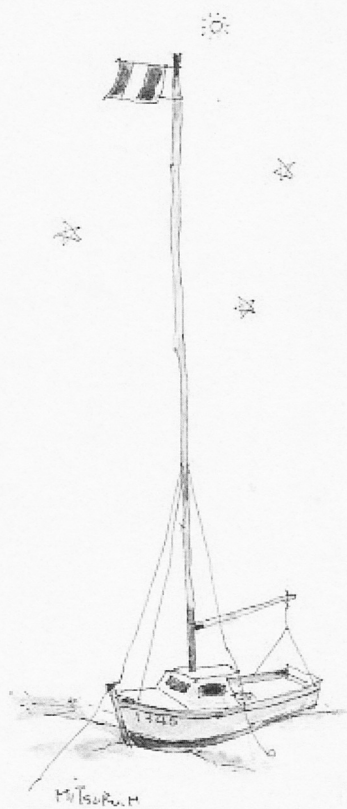
でも、努力したつて体がね、年に応じて衰えていくんだから。このごろやつとおとなしく、いくらかかわいくなつた、つて声が聞こえるようになったの。九〇年たたと自分の体の変化がわからなればかな人間なのね。

食べ物の好き嫌いが多いんだけど、いろんなものを食べなくちゃいけないっていうのは勉強して知っているのよ。ちゃんとして一日に三〇品目とらなくちゃっていうのもね。おいしいものを食べたいとは思わないけど、生きているために必要な栄養素はとらなきゃね。

一応気をつけてるんだよ。子どもを教える立場に立ってた人間だから、あんまり変な失敗して、「なによ、あの先生は」って言われるのは嫌だし。医者言うことは聞くようになったよ。嫁さんが「何度言ってもおかあさんは言うことをきかない」って言ったなら、医者が「本人が言うこときかないなら、本人が悪くなるんだからもう言うな」って言われて。それで目が覚めたの。

強情っていうのかしら、自分でもわからないけど。でも、悪いことは絶対にしないっていうのは頭にあって、悪いことはしてないと思うんだけどね。

(聞き取り 平成二三年九月)



片山の大農家に生まれて

瀧島 貞子

大正九（一九二〇）年生まれ
片山在住

運動が得意な子ども時代

片山の鈴木っていう古い農家の長女として生まれました。兄二人、弟一人、妹二人の六人兄弟で、親たちは畑が忙しく、小学校の頃から弟、妹の面倒はよくみましたね。

ほんとの昔からの農家で、私が小学校へあがる頃までは蚕を飼ってたんですよ。蚕はこのあたりでは珍しくて、嫁ぎ先の瀧島と二軒だけでしたね。余談ですが、実家とここは同じ大工さんが建てたので、嫁いできたときは間取りが一緒、戸棚の場所まで同じでした。

小学校は、当時片山村に一つしかなかった片山小学校に行きました。五年生く

らいのときにドッジボールがはやっていて、朝霞の小学校で対抗試合があつたんです。選手に選ばれて、センターをやりました。当時は車もなくて、みんな歩いて朝霞まで行きましたね。

他に百メートルのかけっこの選手もやっていて、賞状をもらったこともあるんですが、引越しかでなくなつてしまいました。

小学校六年間のあと、同じ学校で高等科が二年ありました。勉強はあまり好きではなかったの、女学校へは行きませ

んでした。

役に立ったお裁縫

高等科を出たあと、冬の農閑期（一月から三月）だけ、片山小の一室を借りて裁縫教室があり、四年間通いました。夏物の浴衣から袷の着物、袴まで習いました。先生は一人で、生徒は四〇人くらいいました。

生地は呉服屋さんから親が買ってくれました。志木の和泉屋という呉服屋さんの番頭さんが、四角い箱にいっぱい反物を入れて自転車で来てくれるんです。せっかく来てくれたんだからと、着物と羽

織で反物を二反くらい買ってくれました。自分の物以外に、妹二人の嫁入り前にもずいぶん縫いました。よそに頼むとお金がかかるけど、私が縫えばって。

瀧島に嫁いでも、主人の妹が結婚する前に、おばあちゃん（姑さん）に頼まれて、袷の着物を十枚くらい縫いましたよ。裁縫は好きでしたね。

行儀見習いで東京へ

嫁に行くものはよそを知らないといけない、って言ってるね、知り合いの紹介で東中野のサラリーマンのお宅に奉公に行つたんです。

結構大きなお屋敷で、六歳と四歳の男の子がいました。可愛い子でね、その子たちの子守やお使い、初めはお料理も奥さんが教えてくれてね。だんだん慣れてきて食事も作れるようになったんですけど、最初は何もわからなくて夢中でしたよ。ご飯も農家は麦とお米が半々だったけど、東京は真っ白なお米でした。

どうでもいい話なんですけど、夏に夕立が降って、下水があふれたことがある

んです。とっさのことで、「おっぴらいた」って言ってしまったって、みんなに笑われて恥ずかしい思いをしました。水があふれることなんですけど、とっさに田舎言葉が出てしまったんですね。なんかついこの間のことのような気がします。

坂の下から上へお嫁入り

一年間の奉公から戻って、家の手伝いをしていたんですが、「瀧島家からぜひ嫁にほしいと言われた」と、親から言われたら仕方ありませんものね。それに青年団の活動を通して主人を知っていたし。当時の青年団と女子青年団は旅行や山登り（筑波山や天覧山）を一緒にしていたので、積極的な女の人はいろいろあったみたいなんですけど、私は内気だったからそんなこともなく過ごしていました。

主人は大正四年生まれで、五歳ちがいです。結婚前のお正月にいつペンくらい映画を見に行ったことは覚えているんですよ。昭和一四（一九三九）年に結婚したんですが、あんまり戦争を意識した覚えはないですね。

結婚式のしきたり

結婚式は瀧島家でやったので、角隠しをして坂の下の実家から歩いて行きました。当時はどこでも家で結婚式をしましたからね。近所の若い衆や娘さんが来てね、障子は開けないで、穴をあけて座敷を覗くんですよ。当日の本膳は手打ちうどん、近所の女の人たちが作ってくれました。

あくる日は片付けでまた集まってもらい、それが終わると座敷で嫁入り道具の披露でした。あんまりいい習慣じゃないけど、だから親は一生懸命に揃えてくれたんですね。たんす二竿、長持ち、洗濯板、たらい、張り板までありました。

式が終わって三日目が里帰り、四日目が髪洗いでまた実家に帰れるんです。式のときの髪は、自分の髪を油で固めて結つたので、あとが大変なんです。お釜でお湯をいっぱい沸かして洗面器で洗うんですけど、今のようないいシャンプーなんかなくて、なかなか落ちなくて。実家だからいいけど、嫁に行つたばかりの

家ではねえ。だからこういう習慣があったんでしょね。

初めての子を亡くして

瀧島の家は両親と主人の弟が二人、妹が二人でしたが、おじいちゃん、おばあちゃん、おばあちゃんにいい人で、世間では「お姑さんに意地悪される」なんて話を聞きますけど、いっさいそういうことはなかったですね。実家とここは親戚なんですよ。最初瀧島から鈴木へ、次が鈴木から瀧島へ、一代あけて私がまた瀧島に来たんですから。

最初の子どもは二月に女の子が生まれました。あの年はお彼岸がきてもまだ寒くてね、生まれたばかりなのに百日咳肺炎で亡くしちゃったの。乳がはってきても飲んでもらえないから苦しくて。

お墓が裏の畑にあるんですけど、夜、食事が済んでお茶碗なんか洗っていると、お墓の方から泣き声が聞こえるような気がつきちゃってね。しばらくそんなでしたよ。亡くした子だからよけいにそんなふうに思うのかもしれないけど、色

が白くて鼻筋が通っていて、一番器量良しだったかもしれないね。

子どもは五人ですが、全部、保谷駅のそばの産婆さんに来てもらいましたね。

主人が自転車で迎えに行ってくれました。お産のあとも一週間くらいお産婆さんを頼んで、赤ちゃんをお風呂に入れてもらってね。お産のあとおばあちゃんを作ってくれたごはん、おいしかったねえ。

食べ物之苦勞はなかった

長男が生まれたのが昭和一六（一九四一）年で、アメリカとの戦争は始まっていたんですが、食べ物之苦勞はあまりなかったですね。親戚の子が三人くらい東京から疎開してきて、片山小に通ったりはしてましたけど。

空襲警報のときなんかは防空壕へずいぶん入りましたが、幸いここへは爆弾は落ちなかったんですよ。武野（たけしの）神社の近くに落ちたという話は聞いたけど、忙しくて行って見たことはなかったですね。

主人は一九年の五月に召集されて、海

軍でフィリピンの方に行きました。でも運がよかったんでしょね、怖い思いはいっぺんきりで、終戦の一〇日後、八月二五日にはもう帰ってこられたんですから。一番遅く出て、一番早く帰ってきて。

暗いうちからの農作業

農家の仕事はほんとに忙しくてね、仕事を休めるのは正月の三が日と、お祭りの日くらいで、こんなに近くても実家に行ったのは決まったときだけでしたよ。

秋の麦まきの頃は、暗いうちに起きて、食事をしてから畑に行っても、まだ暗くてね。でも、向こうの畑ではもつと早くからサツマイモを掘っていてね。声を出さないから暗いうちはわからないの。明るくなったらもういっぱい掘ってあって、明日はうちももつと早く来よう、なんて思っただけ。まあ、みんなよく働きましたね、機械のない時代だったから。

作っていたのは、小麦、サツマイモ、ゴボウ、ニンジン、サトイモ、ジャガイモなんかで、三町歩くらい。田んぼも四反くらいやっていたんで、毎年住み込み

の若い衆を二人くらい頼んでいたね。農協を通して福島の方から来てもらったこともあるね。

でも、今考えると、あの畑、一柵一柵うなつてきれいにして、堆肥をやつて、化学肥料をちよつとやつて、種まいて、そこへ土かけて、まあ一柵を何回歩いたことか。

できた野菜は、大きいなりに井戸から水を入れて洗つてね。サツマイモだつたら箱に詰めて、キャベツなんかは竹で作つた籠に詰めて、スイカは一個一個乾いた布で光らせてから箱に詰めて、息子たちが三輪車に積んで巢鴨とかの市場に持ち込んだんですよ。

畑にいと元氣になつた

おばあちゃんはよく、「まつたくヒロ（主人の浩さん）は不器用で下手だ」つてけなしてたんですよ。上手い人と下手な人では、はかどりがたが違ふんです。草をとるにしても、麦を刈るにしてもね。よその人を頼んで、とつても早い人がいると気が気じゃなくてね、それで私、だ

んだん強くなつたんだわ、きつと。

嫁に来る前、実家では畑仕事をやつたことがなくて、こつちへ来てから覚えたんですけど、大変だと思つたことはないですね。畑が好きだったんですね。朝、ちよつと頭が痛くても、広いところへ出て仕事していると、いつのまにか治つちやつている。

ここのおばあちゃんも畑に行くのが好きでね。赤ん坊が小さい頃、「こんな小さい子がいるんだから、うちの中のことをしてなさい」つて言つてくれたんですが、私も畑に行きたかつたんです。

病院の待合室で、私の腕を見た人から「病気で腕が太くなつたの？」つて言われたことがあるんですよ。やつぱり鍬を毎日持つたりしたからかしら。でも、そのせいというより生まれつきなんでしょうね、骨が太いのは。恥ずかしいけど。

女に生まれてよかつた

私は「女に生まれてよかつた」つて思っていますよ。うちのことをただ一生懸命やればいいんだから。

主人は片山村から新座町、新座市と、議員を七期やつたんですけど、やつぱり大変だつたらうな、と思います。

選挙は大勢の人に厄介になつて、ほんとに大変。私はあんまり手伝わなかつたけど、いやなものだなあ、つて思つてましたね。

（聞き取り 平成二三年五月）
（貞子さんは平成二四年一二月ご逝去されました。）



役場の住民係から市民課へ

金子 喜久代

大正一一（一九二二）年生まれ
菅沢在住

結婚して教員を辞める

昭和三七（一九六二）年に四〇歳で市役所、当時の町役場に勤めまして、定年の六〇歳になった五八年三月まで、ちょうど二〇年おりました。

生まれは川越ですが、浦和で育ちまして、浦和女学校、今の浦和女子高の四年生のときに、教員を養成する埼玉女子師範に入りました。小学校一年生のときの担任がとても優しい女の先生で、着物に紺のはかま姿が格好よくて、「こういう先生になりたい」と憧れたからです。

私は兄を除くと女ばかり四人の長女で、

妹たちもみんな女子師範に入って教員になりました。

女子師範では、生徒は全員、学校に付属した寄宿舎に入ることになっていました。寄宿舎では上級生の「いじめ」があった。ずいぶん怖い思い、嫌な思いもしました。「こういうことはやめよう」と話合って、私たちの学年から下は「いじめ」はなくなりました。

昭和一六（一九四一）年、大宮の日進高等小学校の教員になりましたが、親に「早く嫁にいかないと下がつかえる」と言われました。当時は年の順に嫁ぐことになっていて、私が結婚しないと妹たちも

結婚できません。

そういう事情もあって、翌一七年に二歳で結婚しました。教員は二年で辞めました。今と違って保育園などありませんから、「しかたがない」という感じでした。当時はそれが普通でした。

主人も教員で、同じ学校ではありませんが、教員の講習会などで顔を合わせて、好感をもっておりました。そうしたら、あちらの学校の校長先生から、こちらの校長に「どうだ」とお話があって……。主人はずっと教員をして、最後は新座中学校の校長でした。八年前に亡くなっております。

農家の次男の嫁として

結婚後は大宮に住みましたが、戦争の末期で空襲などもあり、すごく怖い思いもしました。それで、終戦直前の昭和二〇（一九四五）年四月に新座に来ました。主人は次男で、親が近所に家を建ててくれていましたので。

父親は亡くなっていて、長男が本家の農業を継ぎ、主にサツマイモ、それに小麦、大麦などを作っていました。供出はサツマイモで、何貫目とか割り当てがあって、決められた小屋に持っていきました。

朝はおてんとう様が出てくると畑仕事で、主人が学校に出たあと、私も見よう見まねで手伝いました。サツマの蔓刈りでも、慣れなくて遅いので、ほかの人はどんどん進んでしましますから、休むこともできません。せつなかつたです。でも、実家が農家と知っていて、それでも望んで結婚したのですから。

師範に入るとき、親は反対しませんでした。が、当時は女学校を出てお嫁に行く

のが普通でしたから、「学費は出すけど、嫁入り仕度はしない」と言われました。それで、「嫁入り道具が少ない」と、ずいぶん言われました。

当時の農家では、「あそこにお嫁さんがきた」といいますと、三々九度の盃がすんだあと、隣組のおばさんたちが「持ってきたものを見せていただきましょう」と、嫁入り道具を見に来るんです。布団が何組、布団だんすはあるか、着物は、たンスの引き出しを全部開けて、しつけのなかった着物が何枚あるとか。なんとも言えない気持ちでした。

それから、このあたりでは、女の子が生まれると、お嫁さんの実家からお雛様の段飾りをセットで持ってくるらしいんです。二番目に女の子が生まれたとき、私の実家は千葉の鴨川にいて、催促することもできず、「お前のうちは何も持つてこないんだね」と言われて、せつなかつたです。

んは大和田の渡邊さんで、自宅で産みました。お産のあと、主人のお母さんが面倒をみてくれましたが、朝はおかゆが一杯、残ったおかゆに水を足して温めてお昼、おかずはかつお節とお味噌。一週間くらいでしたが、おなががすいて、せつなかつたです。

子育ては終戦からあとのいちばん食べ物のないときでした。菅沢には田んぼがありませんから、農家でもお米がないんです。サツマイモのずい（蔓の柔らかいところ）を煮て食べたりしました。

幾枚もない着物を持って、子どもをおぶって大和田のほうに買い出しに行きました。あちらはお米ができましたから。旧川越街道を下りた大和田角あたりが商店街で、そこから売ってくれそうな農家を訪ねて……。主人を知っていて、「先生のうちならお金でもいいや」と言ってくれる人もいました。

田んぼがない菅沢ですから、食事はうどんが主でした。「朝まんじゅうに昼うどん、夜は残りのくちやくちやうどん」という歌があつたくらいです。ご飯はお米

ご飯よりもうどんが主食

子どもは男・女・男の三人。お産婆さ

が三に麦が七です。娘は終戦後の生まれですが、大和田小学校で、大和田の人のお弁当は真つ白、うちのほうは黒いので、包んでいった新聞紙で隠して食べたと、よく言っていました。

うどんを打つのはだいたい女の人ですが、私はできないんです。それで、家では麦が多くて黒くても、ご飯でした。でも、お葬式があると集まっとうどんを作るんです。「先生んちの母ちゃんはできないんだろ、やってみろ」とか言われて、せつなかつたですね。どこかの家でお葬式があると聞くと、「またか」と気が重かつたです。

水道が引けたときの嬉しさ

その頃は井戸がなくて、炊事もお風呂も野火止用水の水を使っていました。菅沢から野火止あたりは地下水の水位が低くて、井戸を掘っても水が出ないんです。夕立でも降ると、バケツでくんでもどろどろの泥水。それで、各家庭で呼び井戸と言いますか、少し深く掘って用水を流し込んで、そこからくんでいました。私

は浦和で育ちましたから、新座に来たときは「この水を飲むのか」と驚きました。

終戦後、アメリカ兵が海軍の気象台、今の大和田通信基地に駐屯していて、不衛生だから水道をつくれと言われて、菅沢の上(かみ)にある粕壁さんのお宅に井戸を掘りまして、そこから水道を引くことになりました。水道管を通すのに、隣組を単位に当番を決めて、女の人もヨイトマケでもなんでもやりました。子どもをおぶって出てくる人もいました。

水が出たときは嬉しかったですね、昭和二四(一九四九)年の八月二四日です。それまで女の人は大変でしたから。朝早くから夜遅くまでサツマ掘りをやつて、ご飯の仕度をして、水を用永からくんできてお風呂の仕度をして、本当によく働きました。同じ農家でも、井戸がなかった苦労は、ほかの地域の人にはわからないでしょうね。

町役場の住民係として

長男が大学に入ってお金がかかるようになったので、また教員になろうと思

ましたが、三五歳までしか採用しない。それで、町役場に就職したいと思つて、町長の並木庄兵衛さんをお願いに行きました。そうしたら、「いいよ、明日から来なさい」と言われて、当時のことですから試験も何もなくて、そのまま勤めました。一番下の子は小学校五年生ぐらいでしたが、近所の友達を家に呼んでチャンバラしたり、外で桑の実を食べたり、それほど寂しい思いをしたという事はなかったようです。主人は勤めることに反対はしませんでした。家のことはいっさいしませんでした。残業すると、いい顔をしなかつたですね。

入ったときは本庁舎ができたばかりで、二階建てでしたが、ずいぶん立派に見えました。係は総務課と建設課、税務課、保険課、水道課それに出納、それぐらいのものでした。職員は六〇人くらいでした。町会議員の息子とか親戚とか、そういう人がいっぱいいました。女の方は電話の交換手もいまして七人くらいでしたかね。

総務課のなかに住民係、今の市民課が

ありまして、そこに入りました。男の方が二人、女の方が島田さんと渡辺さんの二人でした。当時はコピー機などありませんから、戸籍謄本でも抄本でも全部、手書きです。原本を持ってきて、そのとおり写すんです。何通か欲しいと言われるとカーボン紙を挟んで。

一字でも間違えると訂正するのが大変なので、初めのうちはずいぶん緊張しました。一通つくるのに一時間くらいかかりましたかね。でも、字を書くのは嫌いではありませんでしたから、そんなに苦労とは思いませんでした。

農村から人口が急増して

苦労したのは町民への応対です。応対は主に男の人がしましたが、島田さんも渡辺さんもお勤めして長いので、顔を見ると、名前から住所から家族構成まで頭に入っていて、申請書を見ないでもすぐに原本を取り出せるんです。私は「あれ、だれ？ あれ、だれ？」って。「印鑑証明をくれ」って、申請書を書かないで、実印を置いていってしまう人もいました。

土地が動きはじめたのは、私が入って四〇五年たつた頃です。昭和四二、三（一九六七、八）年頃からですね。当時、土曜日は半日出勤でしたが、不動産屋がお昼五分前ごろに来て、「印鑑証明を二〇通くれ」なんて。みんな手書きです。書いたら町長のハンコを押さなくちゃならない。「あれ、またあの不動産屋が来たよ」なんて言っていました。

人口が増えると職員もどんどん増えました。三分の二くらいが女の人でしたね。四五年に市になると、住民係は市民課になって、記録とか受付とかの係ができました。新座団地やあたご地域の西武住宅ができたのもこの年ですね。

新座団地ができたときは、団地の事務所職員が何人か出張して、朝から夕方まで、そこで転入の申請を受け付けました。

定年までお茶くみも

昭和四九年に新庁舎が建て増しされたときに建設課に異動になりました。管理係といつて、支出をチェックする係です。

係長になりましたから、どこの道路を直した、交差点を直した、などという書類が来ると、自分で見に行きました。

建設課は私の子どもみたいな年齢の職員が多くて、男の職員にもズケズケと遠慮ない口をきいていました。

でも、お茶くみはやりませんでした。朝と昼にお茶を出して、夕方、片付ける。早く来て机の上を拭くのもやりました。お弁当や出前の注文をとるのも女の人で、何がいくつとか注文をとって、お金を集めました。お茶くみがなくなったのは私が退職したあとです。

建設課のあとにはまた市民課に戻って課長補佐になりました。退職の二年くらい前です。女性が課長補佐になったのは黒田さんが最初で、次が島田さん、私はその次くらいでしょうか。

いろんな機械が入ってきて、戸籍謄本でも住民票でも印鑑証明でも、機械でとれるようになりました。最初に入ったのがコピー機で、薄青い地に紫色の字でコピーされる機械です。市長のハンコも印刷されていて、押す必要がなくなりました。

た。

法務大臣から表彰状

二〇年勤めて、休日以外に休んだのは二日くらいでした。日曜日は嬉しかったですね。洗濯したり布団を干したりできましたから。

昭和五七（一九八二）年、戸籍事務の実績を評価するということで、法務大臣から表彰状をいただきました。気恥ずかしい感じですが、いまでもこの表彰状を見ると、当時のことが懐かしく思い出されます。

退職してからは畑の手入れと庭の草むしり、落ち葉掃き、散歩などで一日を過ごしています。お琴とお茶を習って、お琴はもうすぐ免許をもらえるところでしたが、身体を壊して入院したので、そのままになっているのが残念です。

（聞き取り 平成二三年四月）



農家の暮らしとしきたり

新井 登代子 大正一三（一九二四）年生まれ 大和田在住

小見野 寿々 昭和五（一九三〇）年生まれ 大和田在住

井原 ふみ江 昭和七（一九三二）年生まれ 大和田在住

岡野 裕子 昭和一九（一九四四）年生まれ 大和田在住

大和田に来た頃のこと

小見野 所沢の南永井で生まれました。

昭和二七（一九五二）年に二二歳で親の決めた相手と結婚して大和田に来ました。

実家は田んぼはなくて畑だけ、お茶もやっていたので、結構収入があったんです。でもこつちの家は田んぼ四反と畑一町五反位で、秋も稲刈りがあつて、ホウ

レンソウとかを十分に作れないから収入が少なくて、つましくつましくやつてね。

姑さんは、子ども四人いるところへ後妻にきた人だから、めちやくちや大変だった。でも私も兄弟が多くて、「結婚したら帰ってくるんじゃないよ」って言われていたから帰れなかった、辛くてもね。新井 今の富士見市、鶴瀬っていうところで生まれました。結婚は終戦前の昭和

一九年に二〇歳で。相手は従兄弟だけど、全然知らなくて見たこともなかった。青年学校の指導員をしていた。

家は新座幼稚園の筋向かいで、当時は田んぼ九反、畑二町くらいやつてた。家族が二人いたんですよ。年寄り夫婦とその前のお婆ちゃん、主人の兄弟が七人、それと私たち。

田んぼから帰ってくると、二人のお婆

さんの頭をとかすんですよ。カネの桶で布を濡らして髪を拭いてね、梳き櫛でズーツと梳くんですよ。「痛いほど梳いてくんな」って。昔はそんなに洗わなかつたんだね、だからよく梳くんだね。二人の婆さんの頭とかして、ご飯食べてからお風呂。自分の頭は自分でね。

井原 生まれも大和田で、旧姓は茂木です。茂木から井原に昭和二年、二十一歳で嫁ぎました。主人は役所勤めでしたけど、当時の公務員の給料は安くて、お金の苦労で、もう毎日泣いてましたね。

実家は農家で、日曜もなくて大変だったけど、そのかわり雨が降ると「雨降り正月」だってお小遣いを千円くらいもらえたんですよ。友達と池袋で映画を見て食事をしても余って、貯金してたんですけど、結婚してみんな使っちゃいました。最初は「足らないから貸して」なんて親にも借りましたね。返しちや借り、返しちや借り。

朝の四時半から農作業

小見野 田んぼも畑も全部手おこしで耕

していたからね。最初は要領わかんないから馬鹿力いれちゃうでしょ。疲れちゃうって、夕飯が食べられないときもあったんですよ。

新井 昔は機械がなかったからね。井原 農家はなんたって大変。小学校の三年生くらいから、ご飯炊きたり、田んぼに出たり、いろいろとやりましたね。

サツマ掘りなんかになると、朝四時半ころから行って手探りで掘った。朝飯だよーって呼ばれると帰って食べて、ちょっと休んでまた畑に行ってやったんですけどね。朝作りっていうんだけど。あそここの家のほうが早いから、明日はもつと早く行こうって、競争になっちゃう。だからもう農家がいやになっちゃって。

あの時分、サツマイモだのニンジン、ゴボウ、あと麦とかつくっていたね。田んぼは五反くらいで、大和田神社のとなり、今の珈琲館のところは菜種と稲の二毛作、普光明寺の周りは田んぼでした。あそこは深くってね、潜っちゃうんですよ。湧き水があつて、あそこ行っちゃあ水く

んで飲んでました。春になると菜の花がほんとにきれいでね。

怖かった空襲の記憶

岡野 空襲が始まるというので防空壕を掘ったけど、大和田の防空壕は土地が低くて水が出た、ってお婆ちゃんがよく言っていた。入れたものがふやけちゃって、たんすなんかダメにしたって。

新井 湿っぽくなっちゃうのね。井原 空襲時分は大きな防空壕をつくって、中で餅焼いて食べたり。冬は三〇センチくらいある厚い藁布団を敷いてね。新井 うちは庭に掘った防空壕に戸棚を入れちゃったで。

井原 うちなんか竹山の下に掘ってね。夜、空襲があると暗くても行かれるように、縄を家から防空壕まで張っておくんですよ。寝るときは防空頭巾とか履物を頭のところ置いてね。兄弟が多かったので割り当てがあつて、私は弟を帯でおぶって防空壕へ入りましたよ。

岡野 このあたりは結構焼夷弾が落ちてたんだよね。新座には通信隊もあつたし。

井原 柳瀬川の土手のところの田んぼにダダダダーって爆弾が落ちたんですよ、すごかった、そのときは。

新井 爆弾の跡は深い穴で水が出たからね。その穴に砂利を入れたから、今でも砂利が多いんですよ。

井原 今の川越街道からずーっと坂ノ下の方まで焼夷弾が落ちたの。私は小学生だったけど、外で遊んでたんですよ。そしてたらいきなり友達が撃たれそうになったの。ダダダダーって。飛行機は降りるときに音しないんだよ。それでザアアアって上がっていくからね。もうみんな真つ青、怖くて。慌てて防空壕飛び込んだけど、そのときはもういなくなってた。

新井 不発弾で焼けた家が一軒あってね。

井原 不発弾を破裂させようってやったんだよ。

小見野 そしたら失敗しちゃった。

井原 私なんかの同級生の家が焼けちゃったんですよ。

小学生も勤労奉仕に

井原 空襲のあった頃には授業なんかあ

りません。野火止の、今は西友新座店になつてるところに中外化工っていう会社があつたんですよ。みんな鉄砲の弾なんかをつくりに行つてね。小学生も勤労奉仕ね。中学はまだなかったから、新座には。

新井 中学校はね、川越に行かなくちゃなかった。

井原 尋常小学校と高等科二年までつきやなかった。みんな高等科二年で卒業。だから勉強はしないね、本当に。忙しいと、今日はサツマ掘りだ、稲刈りだつて、学校休んで。

新井 鶴瀬から川越まで三里って言つてただけど、うちの兄さんたち二人は、川越の農蚕学校へ、自転車で行つたんですよ。電車も通つていたけど、駅まで離れてるんで。男は学校行つたけど、女はそのかわりに和裁とか洋裁の学校へね。

岡野 お嫁に行く前でしょ、だいたいみんな花嫁修業なのよね。

新井 私なんか鶴瀬から志木まで毎日歩いて行つただけだね。家から志木まで一里（約四キロ）っていったんですよ。

だから履物の日和下駄がね、一週間もたねえ。

小見野 そうだね、昔は下駄の歯が薄くつて短いんだ。

井原 私なんかの時代には下駄は履かなかつたね。

朝まで続いた結婚式

新井 結婚式のときは、迎えには仲人さんが来る。普通は歩きなんだけど、私の家は遠いから車。それにうちは女が大勢だったから、お得意さまだつたんだよ。都合して車で来ました。両親は一緒に来ないんだよ。兄弟や親戚はあとから来るので、仲人さん二人と車に乗つて来ましたね。荷物なんかは先に牛車で運んで。たんす二竿、夜具入れとで三竿ね。それと下駄箱。

岡野 男の人と女の人に仲人さんが一組ずつ付くわけ。

小見野 二人ずつ付いて四人。親戚とかの人数は親が決めっこするんだよ。

岡野 女の人の側が男の人の側より多くなっちゃういけない。人数は三〇人くらい

かな。

小見野 一座敷じゃなく二座敷。最初親戚だけでやって、後座敷が近所の人とか。続けてやったから寝られないんだよね。

井原 たいてい午後だもんね、で後座敷やると夜遅くなっちゃう。

小見野 夜明けまでになっちゃうんだよね。

新井 お友達と呼べないんだよね。

岡野 その時分はね。

新井 料理は魚久という魚屋さんに折箱をつくってもらった。鯛が入っていてね。

小見野 結納っていうのはね、嫁入りの支度金を男が用意するんですよ。

岡野 男性方のお仲人さんがお嫁さんをもらいにきて、目録などと角樽、結納金もってくるじゃない。今度は女性方の仲人さんが受書(うけしよ)をもって向こ

うの家へ行くんだよね。

井原 司会はね、組合のなかに相伴頭(しよばんとう)っていう人がいて、その人たちが進行をやってくれたんだよね。

新井 あと組合にね、お酌のお姉さんを頼むんですよ。年頃のお姉さん、三人く

らい、商売じゃなく近所の娘さんです。

そこがデビューだよね、あその娘がよかつたな、とか言う人がいて。花形だよね。

井原 三々九度はね、「合い杯」っていうたの。小学校あがる前くらいの男の子と女の子がお酒をもつて、お婿さんとお嫁さんに交代で注ぐ。

新井 祝い事に使う朱塗りの杯が蔵にしまつてあるんですよ。赤い箱膳とかも、

どこの家にもありましたね。

岡野 式に呼ばれるのはどの家もだいたいご主人で、女の人はお勝手手伝いに回つてたんだね。葬式でも何でも。

小見野 うどんも家で作ったからね。

岡野 煮物もみんな作るからね。

井原 夜になると麦藁だかなんだか燃やして家ん中入るわけ。

新井 煙の中でも何でも我慢するように、そんな話だよ。

実家に帰るときは

小見野 実家へは昔の五節句には泊まりに行くんですよ。正月に三月、五月、七

月。

岡野 お正月も終わってからね。

小見野 一〇月は秋あがり。

新井 重箱のご馳走をお土産にしてね。

岡野 嫁にいった先から実家へ行くときも、親元が嫁ぎ先へ帰してくれるときも、お土産をもたしてくれるわけよね。お菓子だけど、昔は手作りの。

新井 おはぎとかね。

岡野 そういうものがお土産で行ったり来たりしてたの。

小見野 泊まりに来られると忙しい。子ども連れだしね。

岡野 大和田のお祭りなんかあると、主人の妹とかの婚家に、お祭りだから遊びに来さしてくださいって、二週間くらい前に菓子折りもつて挨拶に行くのよ。そうすると妹が子ども連れで遊びに来られるわけよ、大威張りだね。私のほうは、

自分の実家から連絡がないとね、出かけて行けない。だから親の居るところに嫁いだ人はなおさら気をつかうね。

新井 その点、新家は楽なんだよね。

岡野 その頃、やっぱりお祭りっていう

と、みんな帰ってくるのよね。お神輿見ながら同窓会みたいで、そのとき帰れないと寂しいよね、やっぱり。

井原 実家には帰りたいもんね、いくつになっても。

岡野 子どもが生まれたときは、何でも嫁の親元が用意したね。子どもが生まれて初のお正月に、男の子だったら破魔矢（はまや）、女の子だったら羽子板が届けられる。それも夫側の兄弟たち、親戚より大きいものでなければならなかった。注文する店が一緒だから、全部わかってる。

お宮参りの着物、三月、五月のお節句のお祝い、七五三の装束も全部、嫁の親元から。地元の家では現在もこの慣習が残っていますよ。

麦のご飯から米のご飯へ

井原 戦争の前と後では、食べ物が変わったね。昔はお米のご飯を炊くと、「今日は何の日？」って聞いていたけど、今は毎日お米のご飯。

新井 昔はご飯を二釜炊いたんですよ。

お米ばかりのと、麦と米混ぜたのと。子どもと年寄りはお米ばかり、仕事する人は麦。

岡野 家で一番偉いのは親。亡くなるまではね。今でもそうだけどね。

新井 生ご飯が炊けちゃったときは、もうまったく嫌だったよ。ご飯が生だちよつと匂いがあるのね。麦藁なんか燃やすでしょ。灰がつかえちやってもただ燃やしてたからね、生になっちゃって。そんなことが幾度かあって、そんなときは嫌で嫌で、ご飯食べられなかった。逃げ出したくなっちゃった。別に怒られはしねーんだけどね。

きつと若かったからよ、嫁入り先の人にはこんなもんだって思ってたんだよ。実家にいたときやんねーで、よそへ来て初めてのご飯炊きだから、まったくね、あれは忘れられないね。

(聞き取り 平成二三年二月)

